

笑顔が輝き幸せを感じるふるさと！ 市民協働で創る《誇郷幸輝》のまち

えりぐちしゅうじ
江里口秀次
小城市長

「住みよさ」が示すまちづくりの成果

佐賀県のほぼ中央部、県都・佐賀市に隣接する小城市は、平成17年3月に旧小城郡4町（小城町・三日月町・牛津町・芦刈町）の合併により、新市としての歩みを開始した。

小城市を構成する4町はそれぞれに多彩な個性を有している。鎌倉時代からの歴史を誇る城下町で小京都としても知られる小城町。中世以来の米どころで、現在は佐賀市のベッドタウンとしても人気を集める三日月町。江戸時代から宿場町・商業都市として栄えてきた牛津町、有明海に面する農漁業のまち芦刈町――。

江里口秀次小城市長は、まさに「山の手から海辺までが一体となる合併だった」と述べする。

「合併協議が成立したのは私が小城町の町長を1期務め、2期目に入って9カ月目のこ

とでした。選挙を経てそのまま小城市の市政を預からせていただくことになり、一昨年から4期目に入りました。実はこの個性のかなり違う旧4町を一体化し、同じ方向性を共有しながら市政を運営していくに当たっては、当初、不安感の方が大きかったというのが正直なところでした。実際問題として、市長に就任してからの1期目と2期目のほとんどは、旧4町の一体化に関する各種案件に力を注いだ感があります。

同時にやはり教育関係の各種施策ですね。合併特例債や各種補助金を活用して、一体化とともに旧4町のそれぞれの学校の整備を均一に優先的にを行い、放課後児童クラブなども拡充してきました。

そして合併から8年目の平成25年1月に旧三日月町役場のリニューアルと増築で本庁舎とし、合併当初から続いていた分庁方式を廃止し、三日月町を除く旧3町の役場を解体しました。さらに平成27年度、旧小城町役場跡

に待望の交流拠点施設《ゆめぷらっと小城》が完成したのを契機に、ようやく小城市としての新たなまちづくりへ市政のベクトルが前に向いていった。合併以来の日々を今改めて振り返りますと、そのように思います（江里口市長）

旧小城町役場の跡地にできた《ゆめぷらっと小城》（鉄筋コンクリート3F建て、延べ床





小京都・小城町を代表する祭礼《山挽祇園祭》



ゆめぶらっと小城



小城スマートIC全景

面積約4700㎡)の正式名称は《小城市まちなか市民交流プラザ》だ。新市庁舎とともに小城市の一体化を象徴するシンボリックな施設であると同時に、佐賀県内でも数少ない本格的コンベンション施設であり、最大500



小城藩藩主・鍋島氏が代々桜を植えたと言われる名勝・小城公園

人収容の多目的ホールのほか、市役所出張所、公民館、観光協会、商工会議所なども入居している。小城市最大の中心市街地を成す小城駅エリアに近いことなどもあり、各種のイベントが随時行われ、利用者は市内外に及んでいる（開館3年で予想をはるかに超える利用者数50万人を突破）。
分庁方式の廃止および旧3町役場の解体、本庁舎の新設などを契機に、合併前から懸案になっていた新市としての新たなまちづくりが前向きなベクトルに転換したことの効果は、例えば《ゆめぶらっと小城》の竣工から2年後の平成29年、さらに平成30年と2期連続で《住みよさランキング》（東洋経済新報社選



定)の九州・沖縄編において、小城市がそれぞれ8位、7位と位置付けられたことにも現れているのではないだろうか。
「選定理由としては特に『安心度』『利便度』『住居水準充実度』などが高く評価されたようです。そして一昨年は8位、昨年は7位としましたので、今年(令和元年6月発表)は6位だねと、みんな話しているところですよ(笑)」と江里口市長。
《住みよさランキング》の高評価もさることながら、実際、ここに来て小城市としての独自のまちづくりが軌道に乗りつつあることは、平成29年度から30年度にかけて矢継ぎ早に実施された、市役所の機構改革や西九州大学看護学部の誘致、長崎自動車道・小城PAへのETC搭載専用スマートICの設置、

地方創生全般に関する民間事業者との各種の連携協定の締結などのトピックスからも、十分にうかがえる。

持続可能なまちづくりへの布石

「先に申しましたように小城市の誕生から1期目、2期目で主に新市の土台づくりを行い、3期目で新たなまちづくりへ全体のベクトルを展開する道筋が付きましました。平成29年から始まった4期目ではその方向性を強化していく必要があります。そういう意味で合併後10年間で一体化が進んだ状況下で、市民協働で策定した『第2次総合計画』に基づくまちづくりが平成29年度から開始されたことに



小城市のゆるキャラ「ようかん右衛門」と「こい姫」は子どもたちに大人気

は、大きな意義があると考えます。

折しも令和元年度で、合併に伴う地方交付税の優遇措置が終了します。また、これまで順調に増加傾向が続けてきた『ふるさと応援寄附金』も、寄附者への返礼品を寄附金額の30%以内の地場産品に限定することの影響を考えますと、今後は多くを望めなくなる可能性があります。平成30年度のふるさと応援寄附金は20億円で予算計上いたしましたでしたが、令和元年度は18億円で計上しています。

そうした流れの中で、いかに職員のモチベーションをさらに高めつつ、近未来のまちづくりへの展望をより具体的に市民に示し、市民協働のまちづくりを推進していくことができるのか。

今後も市税やふるさと応援寄附金をはじめとした自主財源などの歳入の確保を地道に図りながら、限られた財源を有効に活用し、山積する課題に対応しつつ、一方では持続可能な小城市を目指した市政運営を多角的に行っていくかなければなりません。市民協働の機運のさらなる醸成とともに、機構改革などによる職員のモチベーションアップ、民間事業者との連携などの積極的な施策はすべて、持続可能な小城市づくりの一環としての取り組みなのです（江里口市長）

まず機構改革として、小城市は平成30年度から、総合戦略課と定住推進課を設置した。総合戦略課は主に地方創生（総合戦略、ふるさと応援寄附金、公共交通などを管轄）にま



豊かな魚介を産出しムツゴロウ・シオマネキが遊ぶ有明海(芦刈町)

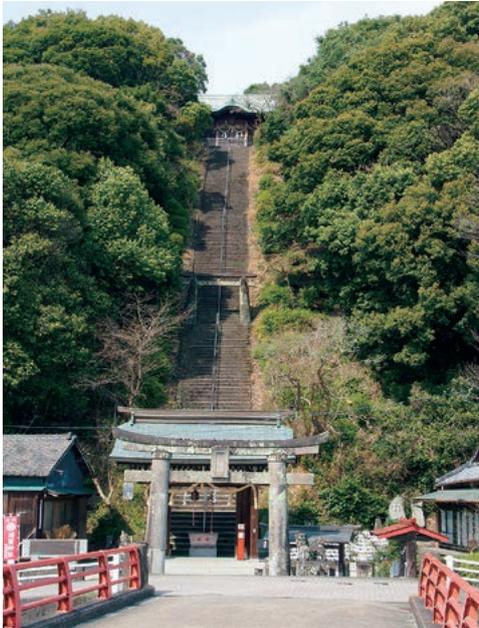


西九州大学看護学部は小城公園の横(右下の門は旧小城市時代の門を再現)

小城市

市 政 ル ホ

(佐賀県)



映画『男はつらいよ』のロケ地でもある須賀神社は中世に千葉氏が築いた千葉城跡

オマネキが生息する有明海が広がっている。また福岡市や佐賀市が通勤圏内にあることに加え、長崎自動車道の小城PAにスマートICが併設されたことで、九州各地へのアクセスは格段に良くなりました。移住・定住の促進だけでなく観光交流人口の増大や企業誘致などにも、今後さらに大きな推進力になると期待しています」(江里口市長)



弥生時代前期の遺跡「土生遺跡(はぶいせき)」(国指定史跡)

つわる案件とともに、多久市との統合病院設置推進事業など、喫緊の行政課題の克服を中心に担当する「市長特命」課ともいえる性格の部署である。

また、定住推進課は従来の建設部まちづくり推進課を定住推進課と都市計画課に区分する形で誕生した。定住推進課設置の主要な目的は、人口減少の抑制と外部からの転入・定住推進にあるが、平成30年4月、市の中心部の小城公園近くに西九州大学看護学部が新たに設置され、新入生の転入が長期的に見込まれるようになったことも大きな契機になったという。この定住推進課の誕生とともに、小城市では移住・定住の支援制度をさらに拡充している。

「具体的には、子育て世代の定住促進を目的にした『定住促進住宅取得奨励金』や、就学・就職(就農・起業)・結婚などを機に小城市に転入し、市内の賃貸住宅と契約された方

を対象に、『移住促進転入奨励金』をそれぞれ交付する制度を創設しました。そのほか空き家バンク制度の活用により、市内の物件情報を案内するサイトの立ち上げを行うなど、小城市への移住・定住を促進するための情報発信にも力を入れています」(江里口市長)

前述の「住みよさランキング」への上位ランクインには、移住・定住促進に関するこうした地道な施策への好感度も反映されているはずだ。また県都・佐賀市に隣接するだけでなく、九州最大の都市・福岡市へもJRの特急を使えば40分程度という立地条件の良さも、住宅地としての小城市の大きな魅力の一つだ。

「移住・定住を推進する小城市のキャッチフレーズは『ちょうどいい感じのローカル(田舎)』です(笑)。城下町(小城町)もあれば、津の里(牛津町)も条里の里(三日月町)もあり、南部の芦刈には、愛嬌のあるムツゴロウやシ

新しい働き方を小城市から発信

次に民間事業者との各種の連携協定を見ていく。小城市は『地方創生総合戦略』を策定した平成27年以降、「①金融機関とのまちひと・しごと創生に関する連携協定(佐賀県内の金融機関、日本政策金融公庫など、平成28年10月)」「②あいおいニッセイ同和損害保険株式会社との地方創生に関する連携協定(平成30年9月)」「③ドローン(無人航空機)を活用した実証実験等による地方創生連携協定(株式会社トルビズオン、平成30年10月)」「④高速道路を活用した地方創生等のプロジェクト連携に関する協定(西日本高速道路株式会社、



小城発祥の全国区的企業・株式会社友樹飲料の大ヒット商品「こどもびいる」の生産ライン(小城堂の郷ファクトリーパーク)

福岡地域戦略推進協議会(FDC)、平成30年12月)を立て続けに締結した。

それらの連携協定がカバーする内容は、地域活性化、健康、教育・文化、定住促進、高齢者支援、子育て支援、防災・災害対策、産業振興、観光振興、農業振興、地域資源の活用、人材育成、交通インフラの活用など、地方創生・地域活性化全般に及ぶ。

中でもユニークなのは「③ドローンを活用した実証実験等による地方創生連携協定」だ。具体的には「上空シェアリングサービスの実証実験」「防災・災害対策」「観光振興」などについての連携を推進する。上空シェアリングサービスとは、「土地の所有者がサイトに土地を登録し、空域利用者(ドローン利用者)がサイトに登録された土地を選び、上空使

用の権利を得るマッチングサイト」を指し、小城市と(株)トルビズオンが共同で実証実験を行っている。ご承知のように事故防止などの観点から、ドローンを使って空域を利用するには、さまざまな制限が設けられている。この上空シェアリングサービスは、土地所有者の許可を得てドローンを飛ばせる空域リストをサイトに登録し、ドローン利用者はそのリストに基づき、ドローン飛行(上空使用)の権利を申し込むことができる。実証実験では市有地が中心になるが、ネット上には既にドローン利用者が上空から撮影した小城市の動画・静止画が公開されている。それを見ると、観光振興および防災などの観点からも、ドローンによる上空からの撮影がいかに有効であるかが改めて分かる。

「北部に天江山系がそびえ、中央部には緑豊かで平坦な佐賀平野が広がり、南部には日本一の干潟とされる有明海が展開している。小城市を構成する、こうした4町の個性と風光明媚な様子、さらには自然の地勢が豊かであるが故の防災上の留意点などが、ドローンで撮影されると本当によく分かります」(江里口市長)

民間事業者との連携では、今年1月に株式会社ママスクエアと連携した「子育てオフィス実証事業」が、「働き方改革」の一つの際立った事例として注目される。これは第三セクターの商業施設《ショッピングプラザセリオ》内に、事業者が運営する託児施設《キッズス



ワーキングルームに隣接するキッズスペース(株)ママスクエア

ペース)付きのワーキングルーム(業務は各種アウトソーシング事業)を設置した事業だ。写真で分かるように広々としたキッズスペースとワーキングルームはガラス壁で区切られているため、キッズスペースからは働くお母さんの様子が、ワーキングルームのお母さんたちからは子どもたちの様子がよく分かる造りになっている。

「(株)ママスクエアと自治体との連携事業は、九州では小城市が初の試みとなっています。子育てオフィスの実証事業として、国の地方創生推進交付金や小城市のふるさと応援寄附金などを活用し、実施しています。今はまだ実証実験中ですが、子育て中のお母さんの継

小城市

市 政 ル ポ

(佐賀県)

統的な収入確保や、産休・育休からの社会復帰プランとしても優れていますし、新たなスキルの獲得の場としても有効なので、この事業は永続的に続けていく価値があると考えています」(江里口市長)

市民が推進するわが町の発信！

個性豊かな旧4町の合併で新市が誕生してから、今年で足掛け15年目。小城市では数年前から市民が中心になり、自主的に「小城を盛り上げよう」とする動きが目立つようになってきた。その代表的な動きが、ボランティアの住民有志らでつくる《小城市映画製作実行委員会》による、小城市をテーマとする映画の自主製作だ。

平成29年4月には江戸時代の牛津町を舞台に、牛津町の住民を主要キャストに製作した『ふたつの巨星』善蔵と与四右衛門(通称・牛津映画)が完成。今年2月には、幕末から明治時代初期にかけての小城町を舞台にした小城町の歴史ドキュメンタリー映画『天山の如くこの男、正直なり(通称・小城映画)』の



「牛津映画」の主要ロケ地にもなった展示施設「牛津赤れんが館」(旧田中丸呉服店倉庫)



「明治の三筆」として知られる小城出身の書家・中林梧竹の作品が常設される中林梧竹記念館



小城市の愛すべきローカル性を紹介する「おぎまんが」は大人気(ネット配信したものを冊子化)

製作を開始。小城町の住民を主要キャストに、今年10月の完成を目指している。

「これらの映画は小城市映画製作実行委員会が、市内の法人・団体・店舗・個人などから協賛金を募って製作してくださったっているものです。小城市としてもできる限りの協力をしていきますが、市民の間から自然発生的に出てきたこうした動きの源泉は、個性豊かな旧4町が歴史的に培ってきた地域の力がまさに今、小城市という一つの都市の下に結集したことにあるのではないのでしょうか。特に第2弾『天山の如くこの男、正直なり』は、小城町が生んだ偉人で明治の三筆とも称される書家・中林梧竹と、幕末・明治の佐賀の風雲児・江藤新平の若き日の交流を描いた作品ということで、私も完成をととても楽しみにしております

ます」(江里口市長)

自分たちの町の歴史と文化を知り、誇りを感じ、地域コミュニティの大事さを再確認するための『ふるさと映画』とのコンセプトを掲げる市民による自主製作映画。第2次総合計画の将来都市像《誇郷幸輝くみんなの笑顔が輝き幸せを感じるふるさと小城》をそのまま体現するかなような市民の動きといえる。また、小城市ではシティブロモーション事業の一つとして、平成29年から自らの「ちよっどいい感じのローカル性」をユーモラスに表現した漫画《おぎまんが》をネット配信し、市内外から人気を得ている。小城市における「まちづくりの前向きなベクトル」は、オール小城市体制でいよいよ本格化し始めたようだ。(取材・文〓遠藤隆/取材日平成31年3月20日)